



## 人のマネはいけないことなの？



### A. どんどん真似をしていきましょう。

できないことは無いに越したことがない、と以前にお伝えしました。

できることが増えていききっかけになるものは、人の真似をする、ということですね。

言葉の習得でも、楽器の演奏やスポーツなどにしても、誰かがそれをやっているのを見て、それを真似てやってみることから始まるのです。

古語では「学ぶ」と書いて「まねぶ」と訓じます。

名詞の「まね」を動詞化させる接尾語の「ぶ」をつけて「まねぶ」となり、「まねぶ」とは「まねをする」という意味になりますね。

なにかを「まなぶ」ために、まずなにかを「まねる」(模倣する)ことが出発点であり必要なことだ、ということをも昔の人は経験則として知っていたのですね。

まねる、ということの中には、人として成長するための大切なヒントがたくさん隠されているわ。

なくてはならないこととして、他者を他者として認知できる力、がまず必要になります。

自分だけでなく対象となる誰かという存在がある、と解ることが必要なの。

ちょっと難しい話になりますが、この他者の存在が解る、ということは、自分というものの存在が解っていないとはいけません。

自分のことを名前呼びする子どもがいますが、普段名前と呼ばれているので自身のことをそう呼ぶのだ、と誤ってしまっています。

ぼく・わたし = ○○(名前)である、という客観的立場にいないわけですね。

この段階だと自分のしていることだけがすべての世界、で、ひとりで遊ぶことのほうが楽しい時期に当たります。

黙々と自分の興味があったり好きだと思ふことだけをやって飽きない。

そこにまねをしたいと思う他者は存在しないわけです。

療育や遊びを通して、他者と関わることができるようになると、他者を他者として認知できるようになるの。

おままごとでは、お母さん役の私、という「自分という私」が「他者としてのお母さん」のまねをする、という他者の認知につながっていきます。

そして子どもが使う言葉は日常的に耳にするものばかりのはずなので、こういうときにこう言えばこんなふうに戻ってくる、とまねを通して学んでいくのです。

「ありがとう」と言ってもらえると嬉しかった「美味しい」と言ってもらえると気分が良かった、など感情を伴った言動や行動を、まねの中で実感していきます。

そうした成長の中で、ああいうふうにやってみたい、ああなりたい、という気持ちが出てくるのね。その気持ちが持ててこそ、人のやっていることをまねしたい、学びたい、ということにつながるのですね。

まねをしたり学んだりするときは、他者の行為を分析して解釈することが必要になるわ。

そのうえで心の中で他者の動きをなぞり、自分の身体で繰り返し再現してみること、が必要になるの。

これは遊びだけではなく、スポーツや言語、音楽でも、毎日の生活に必要な動作でも同じこととされているのよ。

ただ見ている・聞いているだけでは自分のものにはならないし、そのうちできるようになる、というものではないのですね。

これはと思う人の言動をまねしたい、という気持ちを大切に、実践していなければいけないのです。

たぶん今日という日は、過去に「そのうち」と呼んでいた日のことですね。

まねをする、ということは「学習の本質」であり「創造する力」も育むものなの。

もともと子供はこの力を持っているので、周りの大人がことさらに用意する必要はないわ。

[適切な関わり](#)や言葉がけを大人がしていれば、自然に育まれていくものなのですね。

療育や遊びの中で、そして日々の生活の中で「この子にはどう見えているんだろう」「どんなことを感じているんだろう」と想像しながら関わる必要があるの。

子どもが感じている世界を想像しながら関わっていくと、思わぬ発見が見えてくるかもしれません。

そのために[活動やプログラム](#)が、大人にとってもドキドキ・ワクワクする時間でなくてはいけませんね。

まねをする、ということは他者の存在に気付いた、ということでした。

そして、まねをしている自分にも気付いた、ということでした。

自分と他者が関わっていくきっかけになるものが、まねる、ということなのですね。

## [《MENU》](#)

[《ゲームが大好きなのはいけないの？](#)

[失敗がすごくイヤなんだ！》](#)